明治翻訳文学全集《翻訳家編》

全20巻

編集 川戸道昭・中林良雄・榊原貴教

大空社 / ナダ出版センター〈共同出版 2002–2003 年刊〉

揃残部 数組 2026.10

●原作者名●

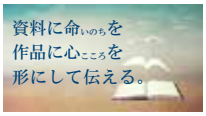
アクサーコフ
アディソン
アフデーフ
アプレイアス
アラビアン・ナイト
アラルコン
アルテンベルク
アンデルセン
アンドレーエフ
イェイツ
ヴィード
ヴェルヌ
ヴェルハーレン
ヴェルレーヌ
ヴォルテール
ウスペンスキー
エインズワース
エッヂワース
エレディア
エンゲル
オオバネル
ガボリオ
クライゲル
クライスト
ロルフ・クリソン
グリム
クルイローフ
クレーガー
グレゴリー
ゴーリキー
コザック伝説
コリツォフ
コリンズ
ゴンチャローフ
ザゴースキン
サッカレー
シェイクスピア
シェリダン
シェンキェヴィッチ
ジュコフスキー
シュニッツラー
シュビン
シュミットボン
シュラーフ
ショー
シラー
スーヴェストル
スコット
スティーブンソン
ルイ・ストロング
セルバンテス
ゾラ
ダヌンツィオ
ダンテ
チェーホフ
ツルゲーネフ
デーメル
テニソン

近代の日本文化形成の中枢にいた文学者たちが
西欧文学作品の何を選択し
《翻訳》を通して
いかに吸収し血肉化したか
24名の作家の代表作品を厳選復刻

井上勤　上田敏　内田魯庵
小栗風葉　尾崎紅葉　小山内薫
押川春浪　草野柴二　黒岩涙香
国木田独歩　嵯峨の屋お室
佐藤紅緑　三遊亭円朝
田山花袋　坪内逍遥　馬場孤蝶
原抱一庵　福地桜痴　二葉亭四迷
益田克徳　松居松葉
森皚峰　森田思軒　森鷗外

全収録作品目録

デュメル
ド・クインゼ
ドイル
ドーデ
ドストエフスキー
ドミートリエフ
トルストイ
ノヴァーリス
ブレット・ハート
ハイゼ
ハイド
バイロン
ハウフ
ハウプトマン
ハックレンデル
バルザック
ハンス・キイゼル
ヒッペル
ブールジェ
フォール
ブラウニング
ブリュドム
フルダア
ブレット・ハート
フレンツェル
ベーコン
ベルジェエ
ボードレール
ボッカッチョ
ホフマン
ホフマンスタール
ホルツ
マアヱ゛ル
マーク・トウェイン
マラルメ
ミッチェル
ミュッセ
メーテルリンク
モーパッサン
モリエール
モレアス
ユゴー
ラーゲルレーヴ
ラフォルグ
ランボー
リイル
リットン
リルケ
ルイ・ストロング
ルードヴィヒ
ルスト
レッシング
レニエ
ローデンバック
ロセッティ
ロチ
ロルフ・クリソン
ワ゛ッセルマン



学術資料出版
大空社出版
www.ozorasha.co.jp

明治翻訳文学全集
《翻訳家編》全20巻

1	三遊亭円朝集
2	福地桜痴・益田克徳集
3	井上勤集
4	坪内逍遥集
5	森田思軒集Ⅰ
6	森田思軒集Ⅱ
7	黒岩涙香集
8	森鷗外集Ⅰ
9	森鷗外集Ⅱ
10	二葉亭四迷集
11	原抱一庵集
12	尾崎紅葉・小栗風葉集
13	内田魯庵・嵯峨の屋お室集
14	馬場孤蝶集
15	松居松葉集
16	田山花袋・国木田独歩集
17	上田敏集
18	森嶋峰・佐藤紅緑集
19	草野柴二・押川春浪集
20	小山内薫集

B5判・上製
総約7,350頁

《翻訳家編》完結時のことばより（抜粋）

翻訳といえば、常に原典との対比が問題とされ、正しい翻訳とは何かと問われる。だが、文化の翻訳とは日本の近代化が西欧の社会をモデルとして移入してきた政治・法律等の例を参酌すれば明らかなように、大枠として近代社会の枠組を踏襲しつつも異なる制度を築き上げてきた。文化の翻訳とは受容する社会の歴史と制度とに大きく制約される。文学作品のみをその例外として語学的な穿鑿をするのは、常識的に考えれば異常な事態と言わざるを得ない（翻訳と創作を差別化して評価を異にしたのは文学研究の制度化の投影であろう）。（…）翻訳文学研究は、異文化を受容する読者（訳者を含めての読者）がいかなる人間存在のあり方を創造し、人間と社会を形成していったかが主題とならなければならない。翻訳作品に即して述べれば、「翻訳」における文学の完成度の基準をどこに据えるかという問題意識につながるであろう。

「明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》」は、62名の西欧作家を軸にして明治人が西欧文化をどのように伝えたかをみてきたが、《翻訳家編》は明治文化の担い手たる各々の翻訳家が時代の転換期に立ち会って、西欧文学のいかなる作品を選択し、翻訳を通し、それらをいかに内在化してきたのかを《新聞雑誌》編集後の新発掘資料に単行本の稀覯書を加えた資料集として編集するものである。

ここに選んだ24名の作家は、それぞれ異なる角度から近代日本の文化形成に積極的にかかわり、その中枢にいた文学者たちであった。彼らが時代に対処し選択を迫られたものが、日本人の生き方の基層となって今日の文化を形作ってきた。その近代像の正否を越えて、彼らの築いた精神の総体こそが私たちの内なる「近代」となっている。今日、翻訳研究が文化研究の名に値するのは、築かれた精神の総体を明らかにし、文化の足場を明らかにしていくことであろう。私たちはその研究の一助となるよう、できる限り明治期の翻訳文学の実相を総体的に調査して基盤整備としての資料集を編纂していく覚悟である。

2003年7月
明治翻訳文学全集《翻訳家編》編集委員会

原作者名 索引

〈 〉は《翻訳家編》、太字は《新聞雑誌編》の巻数

アーヴィング **17**
アクサーコフ〈13〉
アディソン〈4, 5〉
アフデーフ〈13〉
アブレイアス〈6〉
アラビアン・ナイト〈16〉
アラルコン〈17〉
アルテンベルク〈9〉
アンデルセン **46**, 〈13, 16〉
アンドレーエフ〈9, 17, 19〉
イェイツ〈17, 20〉
イプセン **47**
ヴィード〈9〉
ヴェルヌ **27**, **28**, 〈3, 6〉
ヴェルハーレン〈17〉
ヴェルレーヌ〈16, 17〉
ヴォルテール〈13〉
ウスペンスキー〈20〉
エインズワース〈4〉
エッヂワース〈5, 11〉
エレディア〈17〉
エンゲル〈5〉
オオバネル〈17〉
ガボリオ〈7〉
キーツ **15**
キプリング **12**
キャロル **11**
クライゲル〈9〉
クライスト〈8〉
ロルフ・クリソン〈11〉
グリム〈12〉
クルイローフ〈13〉
クレーガー〈9〉
(ハイド・) グレゴリー合作〈20〉
ゲーテ **34**
ゴーゴリ **37**
ゴーリキー **44**, 〈16, 17〉
ゴールドスミス **13**
コールリッジ **15**
コザック伝説〈14〉
コリツォフ〈13〉
コリンズ **9**, 〈11〉
ゴンチャローフ〈13〉
ザゴースキン〈13〉
サッカレー **11**, 〈7〉
シェイクスピア **1**, **2**, **3**, **4**, 〈19（ラム）〉
シェリー **15**
シェリダン〈12〉
シェンキェヴィッチ〈14, 16〉
ジュコフスキー〈13〉
シュニッツラー〈9〉
シュビン〈8〉
シュミットボン〈9〉
シュラーフ〈9〉
ショー〈9, 15, 18〉
ジョンソン **13**
シラー **35**, 〈13〉
スーヴェストル〈5〉
スコット **5**, 〈4〉
スティーブンソン **7**, 〈17, 19〉
ストリンドベリ **48**
ルイ・ストロング〈11〉
セルバンテス〈15〉
ゾラ **30**, 〈12, 14〉
ダヌンツィオ〈12〉
ダンテ **50**, 〈17〉
チェーホフ **42**, **43**, 〈12, 14, 20〉
ツルゲーネフ **40**, **41**, 〈10, 12, 13, 14, 16, 19〉
ディケンズ **6**
デーメル〈9〉
テニソン **16**, 〈20〉
デフォー **13**
デュマ父子 **26**
デュメル〈9〉
ド・クインゼ〈17〉
ドイル **8**, 〈11, 18〉
ドーデ **29**, 〈8, 12, 14, 16〉
ドストエフスキー **45**, 〈9〉
ドミートリエフ〈13〉
トルストイ **38**, **39**, 〈13, 19〉
ノヴァーリス〈17〉
ブレット・ハート〈8〉
バーネット **21**
ハイゼ〈16〉
ハイド(・グレゴリー)合作〈20〉
ハイネ **34**
バイロン **15**, 〈14〉
ハウフ〈8〉
ハウプトマン〈4, 9, 20〉
ハックレンデル〈8〉
バルザック **33**, 〈14〉
ハンス・キイゼル〈9〉
ヒッペル〈9〉
プーシキン **36**
ブールジェ〈14, 16〉
フォール〈17〉
ブラウニング〈17〉
フランス **33**
ブリュドム〈17〉
フルダア〈12〉
ブレット・ハート〈8〉
フレンツェル〈8〉
フローベール **33**
ブロンテ **5**
ベーコン〈5〉
ベルジェエ〈9〉
ホイットマン **22**
ポー **19**
ホーソーン **18**
ボードレール〈17〉
ボッカッチョ **50**, 〈12〉
ホフマン〈8〉
ホフマンスタール〈9〉
ホルツ〈9〉
マアエルリンク〈17〉
マーク・トウェイン **20**, 〈11〉
マラルメ〈17〉
ミッチェル〈16〉
ミュッセ〈17〉
メーテルリンク **49**, 〈17, 18, 20〉
モーパッサン **31**, **32**, 〈1, 11, 12, 13, 14, 18, 20〉
モリエール **23**, 〈19〉
モレアス〈17〉
ユゴー **24**, **25**, 〈2, 18〉
ラーゲルレーヴ〈9, 20〉
ラフォルグ〈17〉
ランボー〈17〉
リイル〈17〉
リチャードソン **13**
リットン **14**, 〈2, 4〉
リルケ〈9〉
ルイ・ストロング〈11〉
ルードヴィヒ〈8〉
ルスト〈9〉
レールモントフ **36**
レッシング〈8〉
レニエ〈17〉
ローデンバック〈17〉
ロセッティ **16**, 〈17, 20〉
ロチ〈17〉
ロルフ・クリソン〈11〉
ロングフェロー **22**
ワーズワス **15**
ワッセルマン〈9〉
ワイルド **10**

❖《翻訳家編》は《新聞雑誌編》収録作品との重複は一篇もありません。

全収録作品目録

〈1〉三遊亭円朝集

●日本近代の言文一致体の文学を語るとき、円朝（1839～1900）の語りを抜きにすることはできない。モーパッサンの「親殺し」の翻案「名人長二」や探偵小説の初期作品ともいわれる『松の操美人の生埋』などを収録。

欧州小説 黄薔薇（原著者不詳 金泉堂 明20・4）
松の操美人の生埋（原著者不詳 大川錠吉 明21・5）（全四十四席のうち第一席～第十二席まで収録）
名人長二（モーパッサン著 中央新聞 明28・4）
《論考》［森鷗外訳「即興詩人」：『源氏物語』と『神曲』を結ぶもの（劍持武彦）］

〈2〉福地桜痴・益田克徳集

●明治期を新聞人として渉った幕臣桜痴（1841～1906）は維新史観を拒否して生きた人である。彼が伝統文化に与し、西欧文化の波に洗われながら歌舞伎革新に向かったのは時代の流れであったろう。桜痴はユゴーの「レ・ミゼラブル」翻案「あわれ浮世」ほかを、益田（1852～1903）は言文一致体として評価の高いリットンの翻訳『夜と朝』を収録。

【福地桜痴編】
あわれ浮世（ユゴー著 太陽 明30・1～4）
【益田克徳編】
夜と朝（リットン著 博文館 明26・10）
《論考》［『夜と朝』の文体について（川戸）］

〈3〉井上勤集

●井上勤（1850～1928）は、明治10年代の西欧文学移入に大きな役割を果たし、とりわけヴェルヌを精力的に紹介した。その井上が明治13年に最初に手がけた『九十七時間二十分／月世界旅行』10冊本を一巻にまとめて収録する。

九十七時二十分間月世界旅行（ヴェルヌ著 大阪・黒瀬勉二・三木美記 明13・11）
序（片岡徹） 凡例
第一巻（砲銃社／社長珍事報告／社長演舌後会衆人気）
第二巻（ケンブリッジ」天象台之返答／月世界之説／米国人月世界事情之不学及信用／大砲弾丸之頌詞）
第三巻（弾丸頌詞之続／大砲沿革之略伝／火薬之疑問／二千五百万人中一人之敵／「フロリダ」及「テキサス」）
第四巻（資本金／石丘／鶴嘴、鋤及ヒ鍬／大砲鋳造落城ノ景況／「コルンビヤド」砲）
第五巻（「コルンビヤド」之続／電信報知／汽船阿土蘭多号ノ旅客／演舌ノ大会）
第六巻（演舌ノ大会之続／月球関係之討論）
第七巻（月球関係ノ討論之続／社長及「ニコール」氏ノ争門）
第八巻（社長及「ニコール」氏ノ争門之続／米国之新府民／弾丸ヲ以テ車ニ換ユ）
第九巻（巨大ノ望遠鏡／結末ノ談話）
第十巻（巨砲発射／巨砲発射後万衆の景況／月世界旅行弾丸之発見）
《論考》［井上勤の『月世界旅行』：本邦初の本格サイエンス・フィクション（川戸）］

〈4〉坪内逍遙集

●逍遙（1859～1935）といえばシェイクスピアであるが、10年代、20年代の訳業は目に触れることが少ない。稀覯書として名高いスコットの『春風情話』、アディソンの作品、および初期翻訳作品の序文を集成する。『小説神髄』と並び、『慨世士伝』の序文は近代文学の方向付けをした優れた文学論となっている。本巻では明治期に脚光を浴びたスコット、リットン、エインズワース、アディソン、ハウプトマンに関心を抱いてきた姿を訳業にて集成。

春風情話（スコット著 中島精一出版 明13・4）
開巻悲憤 慨世士伝 はしがき（リットン著 晩青堂 明18・2）
雷小僧（エインズワース著 都新聞 明25・10）
扇子使用法の練習（アディソン著 早稲田文学 明26・10）
ジョセフ、アヂソンの散文（アディソン著国学院雑誌 明28・9）
心の解剖（アディソン著 新小説 明30・1）
ハウプトマンの「孤営」（ハウプトマン著 趣味 明39・8）
《論考》［明治二十年代翻訳文学とジャンル編成（井上健）］

〈5〉森田思軒集 I

●思軒（1861～1897）の評価は、生前翻訳王と謳われながら、没後一転する。しかし、明治期の翻訳文学は思軒を外して語れず、『思軒全集』は第一巻のみで未刊となっている現状に鑑み、初期翻訳作品を渉猟して、「明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》」とあわせ思軒訳業の全容を全二巻で提示し、思軒再評価の機運を促す。Iで初期翻訳の短篇を集成、明治期の翻訳史の原点を探る。長篇をIIに収め、《新聞雑誌編》と合せその全業績を浮彫りとする。

印度太子舎摩の物語（原著者不詳 郵便報知新聞 明19・10）
英国士官の物語（原著者不詳 郵便報知新聞 明20・3）
貧富（原著者不詳 郵便報知新聞 明20・8）
夢中夢（原著者不詳 郵便報知新聞 明21・1）
定数（原著者不詳 郵便報知新聞 明21・7）
女旅客（原著者不詳 郵便報知新聞 明21・11）
右足（原著者不詳 郵便報知新聞 明21・11）
密封書（原著者不詳 郵便報知新聞 明21・12）
元日（原著者不詳 郵便報知新聞 明21・12）
猫（原著者不詳 郵便報知新聞 明21・12）
倫敦辻馬車（原著者不詳 郵便報知新聞 明21・12）
時計獄（原著者不詳 郵便報知新聞 明21・12）
代言人（原著者不詳 郵便報知新聞 明22・4）
狼声（原著者不詳 郵便報知新聞 明22・5）
一大奇術（原著者不詳 郵便報知新聞 明22・5）
まちがひ（原著者不詳 郵便報知新聞 明22・5）
是はソモ（原著者不詳 郵便報知新聞 明22・5）
巴里探偵の話（原著者不詳 郵便報知新聞 明22・6）
歳盡（スーヴェストル著［屋根裏の哲人］ 都の花 明24・1）
西文小品（旅行の説）（ベーコン著 報知叢話 明24・4）
西文小品（費の説）（ベーコン著 報知叢話 明24・4）
滑稽氏（エンゲル著 国民之友 明25・12）
不思議の後家（エンゲル著 国民之友 明25・12）
一シリング銀貨の履歴（アディソン著 国民之友 明26・1）
千人会（エッヂワース著 国民之友 明26・2）
《論考》初期翻訳文学における思軒と二葉亭の位置：その文体を中心に（川戸）／［森田思軒の伝記を執筆して（谷口靖彦）］

〈6〉森田思軒集 II

金驢譚（アプレイアス著 郵便報知新聞 明20・1～2）
大氷塊（ヴェルヌ著 郵便報知新聞 明21・2～4）
探征隊（ヴェルヌ著 郵便報知新聞 明22・1～3）
《論考》若き日の森田思軒：矢野龍渓との交流を中心に（川戸）／［歴史はフィクションより面白い：森田思軒との出会い（加賀野井秀一）］

〈7〉黒岩涙香集

●「萬朝報」を拠点とした涙香（1862～1920）の探偵小説は一世を風靡した。本書では、その中から傑作を選び一巻とする。

金剛石の指環（原著者不詳 岩本五一 明23・7）
恐ろしき五分間（原著者不詳 岩本五一 明23・7）
婚姻（サッカレー著 岩本五一 明23・7）
紳士三人（原著者不詳 岩本五一 明23・7）
裁判小説 人耶鬼耶（ガボリオ著 大川屋 明26・4）
《論考》森田思軒と黒岩涙香：『レ・ミゼラブル』の翻訳をめぐって（川戸）／［涙香小説の報道性（堀啓子）］／黒岩涙香作品目録（伊藤秀雄）

〈8〉森鷗外集 I

●明治期の西洋翻訳文学史上で鷗外（1862～1922）の果たした役割は突出している。明治期に新聞雑誌に発表された翻訳を年代順に収録し、「明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》」とあわせて翻訳初出集成をめざす。Iは、明治18年に発表された最初の翻訳「盗侠行」から日露戦争までの作品を収録。

盗侠行（訳独逸稗史）（ハウフ著 東洋学芸雑誌 明18・1）
玉を懐て罪あり（ホフマン著 読売新聞 明22・3）
洪水（ブレット・ハート著 しがらみ草紙 明22・10～23・3）
戯曲 折薔薇（レッシング著 明22・10～25・6）
瀛西詩話（1［盲帝の曲］、2［今の英吉利文学］、3［美



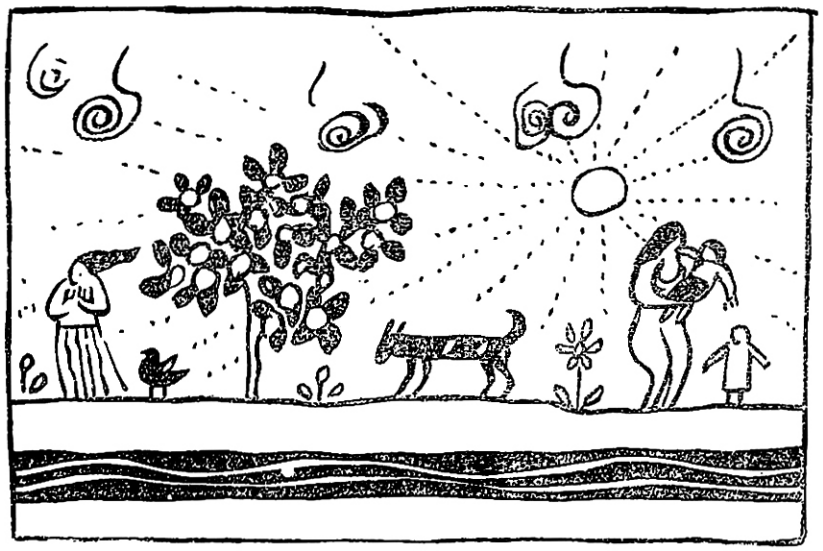
〈1〉より

●収録体裁●

作品は原則として発表掲載のまま、該当のページを複製。
各巻の作品配列は発表順、雑誌・単行本は年月、新聞は年月日を欄外に示す。

B5判（182×257ミリ）

原寸 見本



鰐

ドストエウスキイ作

鷗外譯

一

己の友達で、同僚で、遠い親類にさへなつてゐる、學者のイワン・マトエエキッチュと云ふ男がゐる。その男の細君エレナ・イワノフナが一月十三日午後〇時三十分に突然かう云ふ事を言ひ出した。それは此間から新道で見料を取つて見せてゐる大きい鰐を見に行きたいと云ふのである。夫は外國旅行をする筈で、もう汽車の切符を買つて隱しに入れてゐる。旅行は保養の爲めと云ふよりは、寧ろ見聞を廣めようと思つて企てたのである。さう云ふわけで、言はゝもう休暇を貰つてゐると看做しても好いのだから、その日になんの用事もない。そこで細君の願を拒むどころでなく、却て自分までが、この珍らしい物を見たいと云ふ氣になつた。

「好い思ひ付きだ。その鰐を一つ行つて見よう。全體外國に出る前に、自分の國と、そこにゐる丈のあらゆる動物とを、精しく見て置くのも惡くはない。」夫は滿足らしくかう云つた。

さて細君に聲を貸して、一しよに新道へ出掛ける事にした。己はいつもの通り跡から付いて出掛けた。己は元から家の友達だつたから。

この記念すべき日の午前程、イワンが好い機嫌でゐた事はない。これも

〈9〉より

しき星」、4［白壁の微瑕］、5［再びドーデーのことを記す］国民新聞　明23・2～3）
地震（クライスト著　国民新聞　明23・3）
埋れ木（シュビン著　しがらみ草紙　明23・4～25・4月）
黄綬章（ハックレンデル著　東京日日新聞　明24・3）
《参考》黄綬章（ハックレンデル著　しがらみ草紙　明24・5）
蟻の話（ルードヴィヒ著　海潮　明24・5～6月）
みくづ（ドーデ著　しがらみ草紙　明24・6）
戦僧（ドーデ著　しがらみ草紙　明24・7）
女丈夫（フレンツェル著　国民之友　明25・8）
俘（レッシング著　三木竹二校　しがらみ草紙　明25・9～26・7）
《論考》［森鷗外の翻譯文学との出会い（小堀桂一郎）］

〈9〉 森鷗外集 II

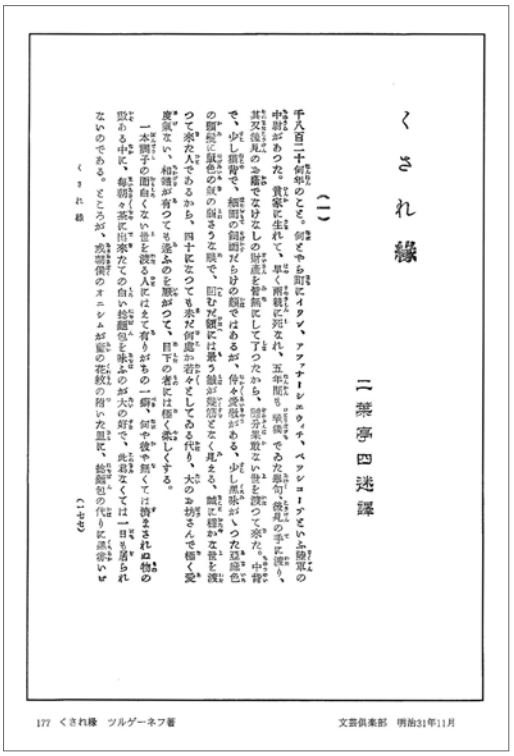
●IIに収める日露戦後の翻訳と《新聞雑誌編》に収めた作品により明治期の鷗外の全容に迫る。

やまひこ（ヒッペル　芸文、万年艸　明35・6～11）
分身（ハイネ　芸文　明35・8）
受戒（クライゲル　芸文　明35・8）
オェディプスとスフィンクスと（ホフマンスタール　歌舞伎　明39・10）
ウント、ピッパ、タンツト（ハウプトマン　歌舞伎　明39・10）
ミットメンシュ（デュメル　歌舞伎　明40・1）
アンドレアス、タアマイエルが遺書（シュニッツレル　明星　明41・1）
ソクラテエスの死（クレーガー　心の花　明41・1）
いつか君は帰ります（ルスト　明星　明41・4）
黄金杯（ヴッセルマン　明星　明41・5～6）
牧師（ラーゲルレーヴ　心の花　明41・10）
わかれ（ホルツ、シュラーフ共著　明星　明41・11）
顔（デーメル　心の花　明42・1）
戯曲　ねんねえ旅籠（ヴィード　心の花　明42・4）
戯曲　家常茶飯（リルケ　太陽　明42・10）
午後十一時（ヴィード　太陽　明43・1）
釣（アルテンベルク　女子文壇　明43・1）
白（リルケ　趣味　明43・1）
歯痛（アンドレーエフ　趣味　明43・3）
鴉（シュミットボン　帝国文学　明43・3）
罪人（アルツィバーシェフ　東亜之光　明43・5）
戯曲　馬盗坊（ショー　歌舞伎　明43・10～12）
一疋の犬が二疋になる話（ベルジェエ　心の花　明44・1）
汽車火事（ハンス・キイゼル　三田文学　明45・1）
駆落（リルケ　女子文壇　明45・1）
祭日（リルケ　心の花　明45・1）
鰐（ドストエフスキー　新日本　明45・5～6）
《論考》［研究への扉：鷗外の翻訳文学・翻訳語（青田寿美）］

〈10〉 二葉亭四迷集

●二葉亭（1864～1909）の訳業は「あひびき」をもって始まり、ロシア文学の日本への移入ばかりか日本の近代文学成立に決定的な役割を果たしたが、20年代の活動は中断し再び翻訳活動が始められたのは30年代からであった。本書ではツルゲーネフの「うき草」「くされ縁」「わからずや」を柱として収め、30年代の二葉亭の訳業を雑誌初出からまとめる。

うき草（ツルゲーネフ著　太陽　明30・5）
親こゝろ（原著者不詳　文芸倶楽部　明31・7）
くされ縁（ツルゲーネフ著　文芸倶楽部　明31・11）
酒袋（原著者不詳　文芸倶楽部　明32・1）
わからずや（ツルゲーネフ著　文芸界　明38・1）
《論考》［オシーナの樹（籾内祐子）］


くされ縁
二葉亭四迷譯
（一）
177　くされ縁　ツルゲーネフ著　　文芸倶楽部　明治31年11月

〈10〉より

〈11〉 原抱一庵集

●マーク・トウェインの訳「該撒惨殺事件」に対する山縣五十雄の誤訳論争によって命を縮めた抱一庵（1866～1904）だが、それは一つの時代に殉じた翻訳家の悲劇であった。その訳業を一つの文化を遵守した文学者の姿と評価し、ここに追悼の一巻を編集。

術士（原著者不詳　郵便報知新聞　明22・11）
湖畔妖物（コリンズ　やよい（東京新報付録）　明25・3）
湖畔妖物（コリンズ　東京新報　明25・3）
明月（原著者不詳　国民之友　明25・8）
食人会（マーク・トウェイン著　太陽　明36・6）
該撒惨殺事件（マーク・トウェイン著　泰西奇文　明36・9）
紳士（マーク・トウェイン著　泰西奇文　明36・9）
造人術（ルイ・ストロング著　泰西奇文　明36・9）
助言（マーク・トウェイン著　泰西奇文　明36・9）
無政府党と一夜（ドイル著　泰西奇文　明36・9）
大頓挫（モーパッサン著　泰西奇文　明36・9）
女探偵（モーパッサン著　泰西奇文　明36・9）
再び女探偵（モーパッサン著　泰西奇文　明36・9）
稀有の裁判（ドイル著　泰西奇文　明36・9）
無音の瀑（ドイル著　泰西奇文　明36・9）
名曲「愛禽」（エッヂワース著　泰西奇文　明36・9）
庭園の快楽（ロルフ・クリソン著　新声　明41・4）
《論考》［明治の探偵小説の思い出（伊藤秀雄）］

〈12〉 尾崎紅葉・小栗風葉集

●硯友社文学は旧派の文学といわれながら、紅葉（1868～1903）は常に西洋文学に自らの小説のアイデアを求めて創作活動を行なった。紅葉訳はグリム、モリエール、ゾラなど、風葉（1875～1926）はモーパッサンの翻訳を収録し一巻とする。

【尾崎紅葉編】
恋山賤（ゾラ著　文庫　明22・10）
三すぢの髪（グリム著　読売新聞　明26）
彼利羅（シェリダン著　歌舞伎新報　明治28）
銃の銘（ボッカッチョ著　太陽　明30・12）
手引の糸（ボッカッチョ著　新小説　明31・1）
阿蘭陀芹（原著者未詳　太陽　明31・1）
をさな心（ドーデ著　新小説　明35・3）
女（モーパッサン著　新小説　明35・9）
路迷ひ（チェーホフ著　文芸倶楽部　明37・1）
霊符（フルダア著　新潮　明38・11）
【小栗風葉編】
応募兵（原著者不詳　新文芸　明34・6）
へそ日記（ツルゲーネフ著　新小説　明36・5）
堀田親子（モーパッサン著　新古文林　明38・5）
帰国（モーパッサン著　新潮　明39・8）
鬼子（モーパッサン著　太陽　明39・10）
血統（モーパッサン著　新潮　明39・11）
妹の子（ダヌンツィオ著　新潮　明41・2）
《論考》［拡げられた作品世界：外国文学を下敷きに（堀啓子）］


小説雑報
有合酒着
武花庵
田舎美術家　ツルゲーネフ著　　太陽　明治33年8月　209

〈13〉より

〈13〉 内田魯庵・嵯峨の屋お室集

●『罪と罰』『復活』の訳者として名高く、ペンの労働者といわれる魯庵（1868～1929）は多くの翻訳を残した。本書では「明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》」とあわせ、魯庵の明治期の訳業を一巻で俯瞰する。二葉亭とならびロシア語から直接ロシア文学の移入に尽力した嵯峨の屋（1863～1947）の翻訳作品を合集。

【内田魯庵編】
巨人談（ヴォルテール著　三籟　明26・4～7）
如安外伝（シラー著　読売新聞　明25・6～7）
しきなみ（原著者不明　文芸倶楽部　明29・7）
極楽郷（『鳥留好語』）（アンデルセン著　警醒社書店　明26）

＊各巻末に翻訳家ごとの「明治翻訳文学年表」付き。　＊《論考》の［　］は「明治翻訳文学と私」で連載されたもの。　＊本目録中の作品年代は年月（連載は初回の月のみ）を記載。

馬鹿者イワン（トルストイ著　学鐙　明35・6～9）
擬宝石（モーパッサン著　太陽　明38・1）
人間の要する地面幾許ぞ（トルストイ著　学鐙　明44・9）

【嵯峨の屋お室編】
母と小児と遇ッた時（原著者不明　国民新聞　明23・3）
月夜のクレームリ岡（ザゴースキン著　国民之友（未完）　明23・10）
寓意談（クルイローフ著　家庭雑誌　明26・9）
クルイロウフの寓意談（クルイローフ著　家庭雑誌　明26・10）
熊及びおさな子（アフデーフ著　家庭雑誌　明26・11）
寓意詩（ドミートリエフ著　家庭雑誌　明26・9）
童話（ジュコフスキー著　家庭雑誌　明26・12）
オブロウモフの幼時（ゴンチャローフ著　しがらみ草紙　明27・4）
田舎美術家（ツルゲーネフ著　太陽　明33・9）
救世主の画像に対して（コリツォフ著　中学世界　明33・11）
田舎家（ツルゲーネフ著　新小説　明34・11）
母の愛（アクサーコフ著　女学世界　明35・10）
私の祖父（アクサーコフ著　太陽　明35・12）
妖婦伝（ツルゲーネフ著　新小説　明36・3）
水車小屋（ツルゲーネフ著　新小説　明36・9）
《論考》内田魯庵とA.ポープ：『文学者となる法』における構想の原点（川戸）／「明治翻訳文学と私＝嵯峨の屋おむろ蔵書一覧（籾内裕子）」

〈14〉馬場孤蝶集

●明治期に翻訳家として生きた孤蝶（1869～1940）であったからこそ『明治文壇回顧』を書き残すことができた。慶応大学で欧州文学を講義し続けた孤蝶の翻訳は、いわゆる「大陸文学」作品に集中している。ドーデ、ゾラ、モーパッサン、ツルゲーネフ、シェンキエヴィッチの訳は明治後半から大正期の文学情況を体現していった仕事であった。

かたみの絵姿（原著者不明　文学界　明28・6）
あら磯（バルザック著　太陽　明29・9）
楽人のねたみ（ドーデ著　文芸界　明35・5）
海音潮声（バイロン著　婦人界　明35・7）
沖の小島（ドーデ著　青年界　明35・9）
終の教（ドーデ著　国文学　明38・10）
まごゝろ（モーパッサン著　国文学　明39・1）
金脳の人（ドーデ著　明星　明39・1）
六号室（チェーホフ著　芸苑　明39・1）
外光（ゾラ著　明星（未完）　明39・4）
わが小説（モーパッサン著　芸苑　明39・8）
同情（モーパッサン著　明星　明39・9）
田鼠（コザック伝説　明星　明40・1）
亡命者（原著者不明　慶応義塾学報（未完）　明40・4）
火と剣（シェンキエヴィッチ著　明星　明41・1）
断頭台（ツルゲーネフ著　新声　明41・1）
処女地（梗概）（ツルゲーネフ著　趣味　明41・12～42・1）
初雪（モーパッサン著　慶応義塾学報　明42・4）
モニカ（梗概）（ブールジェ著　女子文壇　明42・7）
ブウル・ド・スイフ（モーパッサン著　三田文学　明43・5）
《論考》円朝の生きた時代、孤蝶の生きた時代：モーパッサン著「親殺し」の訳を軸にして（榊原）

〈15〉松居松葉集

●松葉（1870～1933）は劇作家として著名であるが、翻訳家としても多くの訳業を残している。ゾラ、ホーソーン、モリエール、シェイクスピアなどを訳しているが、とりわけ、『鈍機翁冒険譚』はセルバンテスの『ドン・キホーテ』の最初の翻訳書として高く評価されている。本書では、これとバーナード・ショーの「二十世紀」を併載し一巻とする。

鈍機翁冒険譚（世界文庫第九十編）（セルバンテス著　博文館　明26・10～11）
二十世紀（ショー著　早稲田文学　明44・9）
《論考》「〈戦後〉の始まった頃：圏外から見た学会胎動期（稲村徹元）」

〈16〉田山花袋・国木田独歩集

●花袋（1871～1930）のモーパッサンとの出合いはあまりにも有名であるが、本書では花袋の多岐にわたる西洋文学紹介の訳業を紹介し、また独歩（1871～1908）はツルゲーネフの「決闘家」、ゴーリキーの「人生」などを収録し、自然主義文学と人生を考察する一巻とする。

【田山花袋編】
夕立（ミッチェル著　穎才新誌　明23・6～7）
跛娘（ドーデ著　文芸倶楽部　明28・2）
古井水（原著者不詳　家庭雑誌　明28・5）
雛っ児（アンデルセン訳　少年世界　明30・6）
入寇（ドーデ著　太陽　明33・10）
灯台守（シェンキェヴィッチ著　太陽　明35・2）
最後の一滴（ブールジェ著　太陽　明35・7）
思ひ出（風／雨）（ヴェルレーヌ著　太陽　明36・2）
島の墳墓（ドーデ著　太陽　明36・10）
海上二里（ハイゼ著　新古文林　明38・7）
魔国（アラビアン・ナイト）　新小説　明39・3）

【国木田独歩編】
宝（原著者不詳　女学世界　明35・9）
決闘家（ツルゲーネフ著　文芸倶楽部　明37・4）
人生（ゴーリキー著　近時画報　明39・5）
《論考》媒介者としての独歩：ヨーロッパから日本、そして韓国へ（丁貴連）

〈17〉上田敏集

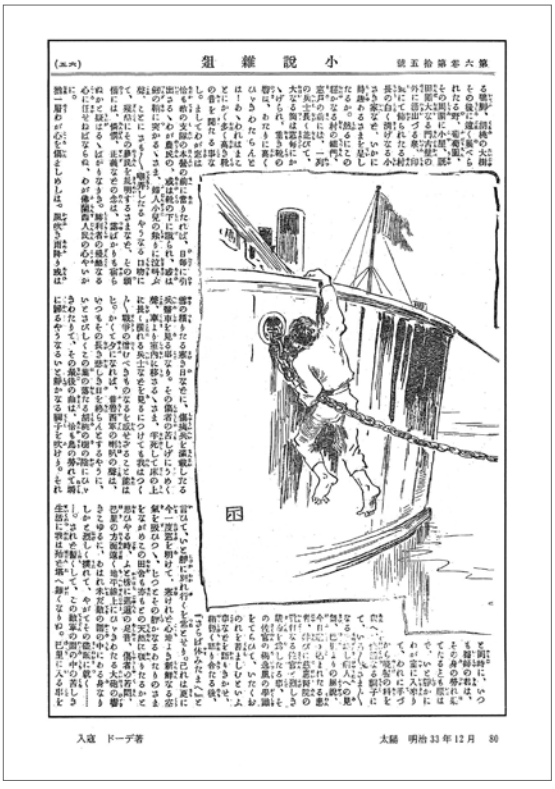
●フランス象徴詩の紹介者としての敏（1874～1916）の役割は高い。訳業は『海潮音』にまとめられ名高いが、本書ではその初出を雑誌から収載し、かつ敏の訳業全般を俯瞰する一巻とする。

まぼろし（ろちを和げたる）（ロチ著　帝国文学　明33・8）
四季賦（マアエル著　帝国文学　明34・1）
黒瞳（アラルコン著　小説青燈集　明34・10）
夜のけはひ（スティーブンソン　帝国文学　明35・1）
鷹の歌（ゴーリキー著　芸文　明35・6）
小曲／恋の王座（ロセッティー著　万年艸　明35・12）
女の眼に映するこよなきもの（ド・クインゼ著　心の花　明36・1）
出現／至上善（ブラウニング著　万年艸　明36・2）
夢（プリュドム著　白百合　明36・11）
鷺の歌（象徴詩）（ヴェルハーレン著　明星　明37・1）
春の貢（ロセッティ著　心の花　明37・1）
新生（ダンテ著　中央公論　明37・10）
出征（エレディヤ著　明星　明38・1）
象徴詩　法の夕（ヴェルハーレン著　明星　明38・6）
象徴詩　落葉（ヴェルハーレン著　明星　明38・6）
象徴詩　水かひば（ヴェルハーレン著　明星　明38・6）
象徴詩　花冠（レニエ著　明星　明38・6）
象徴詩　黄昏（ローデンバック著　明星　明38・6）
象徴詩　銘文（レニエ著　明星　明38・6）
象徴詩　愛の教（レニエ著　明星　明38・6）
海潮音　大飢餓（リイル著　明星　明38・7）
海潮音　床（エレディア著　明星　明38・7）
海潮音　信天翁（ボードレール著　明星　明38・7）
海潮音　よく見る夢（ヴェルレーヌ著　明星　明38・7）
海潮音　人と海（ボードレール著　明星　明38・7）
白琺瑯　珊瑚礁（エレディア著　明星　明38・9）
白琺瑯　破鐘（ボードレール著　明星　明38・9）
白琺瑯　嗟歎（マラルメ著　明星　明38・9）
白琺瑯　火宅（ヴェルハーレン著　明星　明38・9）
白琺瑯　畏怖（ヴェルハーレン著　明星　明38・9）
白琺瑯　賦（モレアス著　明星　明38・9）
白琺瑯　白楊（オオバネル著　明星　明38・9）
白琺瑯　海のあなたの（オオバネル著　明星　明38・9）
時鐘（ヴェルハーレン著　明星　明38・10）
心情（イェイツ著　明星　明38・12）
おもかげ（ノヴァーリス著　明星　明39・1）

＊各巻に装幀・挿画等の貴重写真収載



〈8〉口絵より



〈16〉より

旅行（アンドレーエフ著　芸苑　明39・1）
春夜（詩神／詩人）（ミュッセ著　明星　明39・4）
小曲　よそ人のあざむが如く（ダンテ著　芸苑　明40・3）
これはもと（アンドレーエフ著　趣味　明40・5）
温室／心（メーテルリンク著　哲学雑誌　明40・11）
クサカ（アンドレーエフ著　新小説　明42・1）
恐怖（沈黙、里子）（アンドレーエフ著　中央公論　明42・5）
虱とるひと（ランボー著　女子文壇　明42・5）
俊傑（ヴェルハーレン著　芸文　明43・6）
別離（フォール著　芸文　明44・1）
両替橋／夏の夜（フォール著　芸文　明44・5）
印象詩　お月様のなげき（ラフォルグ著　三田文学　明45・1）
印象詩　日曜日（ラフォルグ著　三田文学　明45・1）
印象詩　ピエロオの詞（ラフォルグ著　三田文学　明45・1）
印象詩　月の出の前の対話（ラフォルグ著　三田文学　明45・1）
印象詩（ラフォルグ著　三田文学　明45・1）
《論考》上田敏とアンドレーエフ：その翻訳を中心に（塚原孝）／アンドレーエフ翻訳作品目録（塚原）

〈18〉 森鷗峰・佐藤紅緑集

●ドイル「緋色の研究」の訳「モルモン奇譚」は、日本の探偵小説史上論議の的となっている作品。この一編を初出紙から採録。家庭小説の代表的作家といわれる紅緑（1874～1949）が、作家研究で見落とされている青年期に訳出したメーテルリンク、ユゴー、モーパッサン等の作品を探索してここに収める。

【森鷗峰編】
モルモン奇譚（ドイル著　時事新報　明34・11～35・1）
【佐藤紅緑編】
モンナ・ワンナ（メーテルリンク著　新潮　明38・2）
深森（ユゴー著　新潮　明38・2）
墓標（モーパッサン著　新潮　明39・9）
犠牲（ユゴー著　文芸倶楽部　明42・4）
何も言へぬ（ショー著　演芸画報　明42・11）
《論考》『緋色の研究』翻訳書誌（榊原）／森鷗峰略歴

〈19〉 草野柴二・押川春浪集

●草野柴二（1875～?）はモリエールの翻訳家として有名だが、「明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》」との重複をさけ、アンドレーエフ、ツルゲーネフ、トルストイ、イプセンの翻訳を収めて、草野の訳業を俯瞰する。春浪（1876～1914）は、彼が生涯関心を抱き続けたスティーブンソンの翻訳と新発掘のラム編の「シムベリン」訳を収録。

【草野柴二編】
喜劇　艶舌魔（モリエール著　明星　明37・6）
（参考：モリエール全集序　金尾文淵堂　明41・4）
人間伝（アンドレーエフ著　明星　明41・1）
猶太人（ツルゲーネフ著　帝国文学　明41・3）
アンナ・カレンナ（トルストイ著　新声　明42・3）
絞首台まで（アンドレーエフ著　開拓者　明43・4）
【押川春浪編】
新アラビヤンナイト（スティーブンソン　大学館　明36・7）
王女の旅（シェイクスピア（ラム）　婦人界　明36・11）
《論考》押川春浪と『新アラビヤンナイト』（川戸）／［日本近代文学は翻訳に始まる（横田順彌）］

〈20〉 小山内薫集

●森鷗外に翻訳家として認められ、その後自由劇場、築地小劇場で翻訳劇による近代劇導入に果たした薫（1881～1928）の役割は大きい。「万年艸」時代の翻訳から、ゴーリキーの「夜の宿」、チェーホフ「犬」、メーテルリンク「タンタヂイルの死」に至る明治期の訳業を俯瞰する。

墓（モーパッサン著　万年艸　明35・10）
地の歌「セオキオ夜泊」の一節（シェリー著　万年艸　明35・11）
地の歌　蜈蚣と蟋蟀（キーツ著　万年艸　明35・11）
地の歌　むなしき月日（ロセッティー著　万年艸　明35・11）
恋の葬（テニソン著　万年艸　明35・12）
彼得の母（ラーゲルレーヴ著　帝国文学　明38・9）
呪詛（ラーゲルレーヴ著　帝国文学　明39・3）
糞（ニコライ・ウスペンスキイ著　家庭文芸　明40・1）
牧歌（ハウプトマン著　太陽　明40・8）
使徒（ハウプトマン著　太陽　明41・1）
墓畔（ラーゲルレエフ著　帝国文学　明41・1）
貧民院（ハイド、グレゴリー合作　早稲田文学　明42・1）
砂時計（イェイツ著　歌舞伎　明42・1）
犬（チェーホフ著　新小説　明43・7）
夜の宿（ゴーリキー著　三田文学　明43・11）
タンタヂイルの死（メーテルリンク著　三田文学　明45・4）
《論考》［内田魯庵とハズリットの謎（泉谷寛）］

明治翻訳文学全集
《新聞雑誌編》 全50巻 別巻2

巻	書名	ISBN
1	シェイクスピア集Ⅰ	978-4-86688-111-9
2	シェイクスピア集Ⅱ	978-4-86688-112-6
3	シェイクスピア集Ⅲ	978-4-86688-113-3
4	シェイクスピア集Ⅳ	978-4-86688-114-0
5	スコット／ブロンテ集	978-4-86688-115-7
6	ディケンズ集	978-4-86688-116-4
7	スティーブンソン集	978-4-86688-117-1
8	ドイル集	978-4-86688-118-8
9	コリンズ集	978-4-86688-119-5
10	ワイルド集	978-4-86688-120-1
11	サッカレー／キャロル集	978-4-86688-121-8
12	キプリング集	978-4-86688-122-5
13	十八世紀イギリス文学集	978-4-86688-123-2
14	リットン集	978-4-86688-124-9
15	イギリス詩集Ⅰ	978-4-86688-125-6
16	イギリス詩集Ⅱ	978-4-86688-126-3
17	アーヴィング集	978-4-86688-127-0
18	ホーソーン集	978-4-86688-128-7
19	ポー集	978-4-86688-129-4
20	マーク・トウェイン集	978-4-86688-130-0
21	バーネット集	978-4-86688-131-7
22	アメリカ詩集	978-4-86688-132-4
23	モリエール集	978-4-86688-133-1
24	ユゴー集Ⅰ	978-4-86688-134-8
25	ユゴー集Ⅱ	978-4-86688-135-5

巻	書名	ISBN
26	デュマ父子集	978-4-86688-136-2
27	ヴェルヌ集Ⅰ	978-4-86688-137-9
28	ヴェルヌ集Ⅱ	978-4-86688-138-6
29	ドーデ集	978-4-86688-139-3
30	ゾラ集	978-4-86688-140-9
31	モーパッサン集Ⅰ	978-4-86688-141-6
32	モーパッサン集Ⅱ	978-4-86688-142-3
33	フランス文学集	978-4-86688-143-0
34	ゲーテ／ハイネ集	978-4-86688-144-7
35	シラー集	978-4-86688-145-4
36	プーシキン／レールモントフ集	978-4-86688-146-1
37	ゴーゴリ集	978-4-86688-147-8
38	トルストイ集Ⅰ	978-4-86688-148-5
39	トルストイ集Ⅱ	978-4-86688-149-2
40	ツルゲーネフ集Ⅰ	978-4-86688-150-8
41	ツルゲーネフ集Ⅱ	978-4-86688-151-5
42	チェーホフ集Ⅰ	978-4-86688-152-2
43	チェーホフ集Ⅱ	978-4-86688-153-9
44	ゴーリキー集	978-4-86688-154-6
45	ドストエフスキー集	978-4-86688-155-3
46	アンデルセン集	978-4-86688-156-0
47	イプセン集	978-4-86688-157-7
48	ストリンドベリ集	978-4-86688-158-4
49	メーテルリンク集	978-4-86688-159-1
50	イタリア文学集	978-4-86688-160-7
別巻	明治期翻訳文学総合年表／総目次・総索引【品切】	



B5 判・上製　総約 19,800 頁

編集　川戸道昭・中林良雄・榊原貴教
●編集協力
〈制作・ナダ出版センター／大空社 1996–2001 年刊〉

各巻定価（本体 15,000 円＋税）

残部僅少
2026.10

＊詳細はホームページ掲載（または冊子進呈）

明治翻訳文学全集《翻訳家編》 全20巻

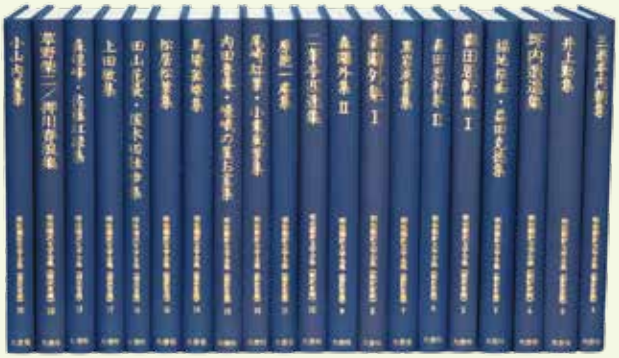
編集 川戸道昭・中林良雄・榊原貴教　　大空社 / ナダ出版センター〈共同出版 2002–2003 年刊〉

巻	書名（頁数）	ISBN
1	三遊亭円朝集（310 頁）	978-4-86688-161-4
2	福地桜痴・益田克徳集（470 頁）	978-4-86688-162-1
3	井上勤集（460 頁）	978-4-86688-163-8
4	坪内逍遥集（350 頁）	978-4-86688-164-5
5	森田思軒集 I（370 頁）	978-4-86688-165-2
6	森田思軒集 II（370 頁）	978-4-86688-166-9
7	黒岩涙香集（380 頁）	978-4-86688-167-6
8	森鷗外集 I（380 頁）	978-4-86688-168-3
9	森鷗外集 II（390 頁）	978-4-86688-169-0
10	二葉亭四迷集（360 頁）	978-4-86688-170-6
11	原抱一庵集（330 頁）	978-4-86688-171-3
12	尾崎紅葉・小栗風葉集（320 頁）	978-4-86688-172-0
13	内田魯庵・嵯峨の屋お室集（350 頁）	978-4-86688-173-7
14	馬場孤蝶集（400 頁）	978-4-86688-174-4
15	松居松葉集（400 頁）	978-4-86688-175-1
16	田山花袋・国木田独歩集（300 頁）	978-4-86688-176-8
17	上田敏集（340 頁）	978-4-86688-177-5
18	森皚峰・佐藤紅緑集（380 頁）	978-4-86688-178-2
19	草野柴二・押川春浪集（360 頁）	978-4-86688-179-9
20	小山内薫集（320 頁）	978-4-86688-180-5

揃残部 数組 2026.10

全 20 巻揃 定価（本体 300,000 円＋税）

〈分売可〉
各巻 定価（本体 15,000 円＋税）
＊一部の巻は分売不可



B5 判・上製　総約 7,350 頁

西欧作家別《新聞雑誌編》を縦糸とし、翻訳家ごとに巻別する《翻訳家編》を横糸として明治期翻訳文学の全体像を浮かび上がらせる。

明治翻訳文学全集 編集方針

1 《新聞雑誌編》全 50 巻の本巻は、明治期の新聞雑誌に掲載された翻訳作品を各作家別（62 名の作家を収録）に集成、イギリス文学 16 巻、アメリカ文学 6 巻、フランス文学 11 巻、ドイツ文学 2 巻、ロシア文学 10 巻、北欧・南欧文学 5 巻とし、別巻として明治期翻訳文学総合年表、総索引・総目次の 2 巻を付す。
2 《翻訳家編》全 20 巻は、明治期の新聞雑誌および単行の稀覯書より 24 名の翻訳家別に翻訳作品を収録する。
3 《新聞雑誌編》《翻訳家編》には、収録作品に重複は一篇もない。
4 各巻頭口絵に、作品（装幀・口絵・挿絵・誌面等）・作者・翻訳家の写真・肖像等を配する。
5 作家・翻訳家ごとに「明治翻訳文学年表」（新聞・雑誌・単行本）を作成し該当巻末に収録する。
6 各巻に研究者による作家・作品論、目録・書誌、また翻訳文学との関わりについての論考を掲載する。

＊《新聞雑誌編》巻一覧は 7 ページ

学術資料出版
大空社出版
www.ozorasha.co.jp

eigyo@ozorasha.co.jp
TEL:042-306-3383
FAX:042-306-3384
東京都東村山市秋津町 5-24-13-101
（〒189-0001）